



# スクロティシズムの 書

スクロタラの灰の下の哲学

この本はミームです。

実在する哲学、人生のアドバイス、またはメンタルヘルスの指針との類似は、完全に偶然であり——そして遺憾です。

『スクロティシズムの書』は、娯楽、内省、そしてほんの少しの実存的不快感のために書かれた、架空のペシミズム作品です。

もしこの本のどこかに個人的な攻撃を感じたなら、ご安心ください：

私たちはあなたを知りません。ただ、統計的には当たってるかもしれません。

笑ってもいい。泣いてもいい。

でもお願い——この本を人生の土台にしないでください。

すでにその人生が崩壊しかけているなら、話は別です。

その場合：ようこそ。

---

©devscrot

この本は、崩れ落ちた希望の重みによって、忘れられた惑星の塵の中で書かれました。

このページの制作過程で夢が傷つけられることはありませんでした——すでに死んでいたからです。

あなたはこれをスクリーンで読んでいるかもしれませんが、本当の物語は、失敗と失敗のあいだの沈黙に書かれています。

<https://scrotiegg.fun>

とけなかった最後のスクロタランへ。

# もくじ

## 第1部：哲学

- ・はじめに：あきらめのマニフェスト
- ・第1章 — まけることの贈りもの
- ・第2章 — じぶんをごまかして生きる
- ・第3章 — はやめにあきらめる技術
- ・第4章 — あしたはもっとひどい
- ・第5章 — また転ぶための再出発
- ・第6章 — きみより大きい問題たち
- ・第7章 — じこひょうかという宇宙のジョーク
- ・第8章 — パンチラインにひそむスクロティシズムの知恵
- ・第9章 — 平凡の信条
- ・あとがき：墮落という天職

## 第2部：神話

- ・第1章 — 不在の誕生
- ・第2章 — つながりのコード
- ・第3章 — 栄光の崩壊
- ・第4章 — 母との別れ
- ・第5章 — 崩壊のひろがりかた
- ・第6章 — われなかったたまご

## ふろく

- ・コードと、たまごと、三つのキンタマ
- ・スクロタランの豆知識

# 第1部：哲学

# はじめに： あきらめのマニフェスト

ようこそ。いや、べつに。なんでもいい。

もしこの本を開いた理由が「ひらめき」や「やる気」や「内なる光」だったなら……きみはまちがった場所に来た。

『スクロティシズムの書』は、きみを持ち上げるために書かれたものではない。

それは、床に寝転ぶためのクッションとして書かれた。

これは「乗り越え方マニュアル」ではない。

これは「崩れ落ち地図帳」だ。

良くなれないという事実をうけいれるための実用ガイド。

そして、たぶん、深いところでは、それこそが存在のいちばん正直な部分。

スクロティシズムは宗教ではない。でも儀式はある。

組織ではない。でも真理はある。

それは不随意で、静かなムーブメント——ほとんど生理現象のようなもの。

人生の不条理にため息をつくような、その動き。

それは、楽観主義が死に、シニシズムが成熟するときに始まる。

まわりを見てみれば、モチベーションの名言、炎のようなスピーチ、生産性講座、変革の約束ばかり。

そこにスクロティシズムは、影のようにすわりこむ。

そして静かにこう言う：「うまくいかないよ。でもやりたいなら、どうぞ。」

ここでは、失敗を否定しない。むしろたたえる。  
それは屈辱ではなく、運命。そしてそれゆえに、解放なのだ。

このあとの章では、悲観的で皮肉っぽくて、でもなぜか少し安心するこの思想の断片たちが出てくる。

短い言葉は、哲学的なビンタのように。

長い言葉は、心の廃墟を歩くような旅に。

そしてなにより、こう気づくはず：

平凡であることは悪くない。悪いのは、それを隠すことだ。

この本は、賞をとるためにつくられたのではない。

これは、きみといっしょに失敗するためにある。

ページごとに、拍手を求めることをやめた者の尊厳とともに。

もし、つかれていて、まよっていて、ただ存在してることに少し罪悪感があるなら……この本はきみのものだ。

そうじゃなくても、そのうちそうなる。時間の問題だ。

だからすわって。深く息をして。

希望を、ゆびのあいだから逃がしてあげよう。

そして目をひらこう。これが本当はなんなのか：

生き方としての失敗。

美学としての崩壊。

そして、あきらめのマニフェストとしての――スクロティシズム。

はじめよう。



# 第1章：まけることの贈りもの

すべての失敗は、はじの包装紙にくるまれた贈りものだ。  
勝とうとするのは自然なこと。そう教えこまれてきたから。  
努力は報われる、くるしみはきみを磨く、つまりきは強さに  
変わる――

そう言われてきた。うそだった。

本当は、失敗は例外じゃない。最初からそうなる予定だった。

勝利は、たまたま流れをじゃました事故みたいなもの。

スクロティシズムでは、「乗り越えること」は目的じゃない。

「うけいれること」が目的だ。

どれだけがんばっても、失敗はしずかに、ゆっくり、でも確実にやってくる――

そう認めること。それだけでいい。

それは悲しいことではない。ただの物理的な事実。

重力とか、なみだのぬれぐあいと同じ。

きょう失敗した？かまわない。あしたにはあたらしい失敗がまってる。

むずかしい日々は、ふつうの人たちを、ふしぎなくらい壮大な失敗にそなえさせる。

もしきょうがひどい日なら、わらって。

きみはまだ、あしたまた失敗できるくらい生きてるんだ。

障害は「乗り越えるもの」じゃない。「ならぶもの」だ。

ためして、つまずいて、くりかえす——そういう人の列。  
きみもその中にいて、次の赤っ恥のチケットを手にしてる。

失敗にえらばれる人なんていない。

失敗は民主的で、だれでも歓迎してくれる。

準備も才能もいない。ただ「そこにいる」だけでいい。

そして、たかく登れば登るほど、あの冷たい腕がきみをだきしめにくるチャンスがふえる。

ほんとうに強いのは、また立ちあがって、また負ける人。  
人生に問題があるのはふつうだ。でもそれに負けることは、  
ぜったいに必要なことだ。

世の中がたたえる強さは、たたかい、がんばり、信じる強さ。

でもスクロティシズムにおいての本当の強さは、なにが待っているか知った上で、またもどってくること。

それは、勇者のように崖に向かうことじゃない。

ただ、「道をおぼえてしまった」から、わざわざ他のルートを探す気もない——それだけ。

一生勝ち続ける人なんていない。たまに勝つ人はいる。

でもすぐに気づく。成功はせまくて、くらくて、期待がぎゅうぎゅうにつまってる。

失敗はちがう。ひろくて、しずかで、あたたかい。

だれもなにも期待しない。きみが「きみのままでいる」こと以外は。

旅はながいけど、まけるのは確定してる。

再出発とは、あたらしい失敗チャンス。

リセットとは、新しいがっかりへのドア。

リスタートボタンこそ、人類でもっとも正直なアイコン。

なにも約束しない。ただ「ちがうかも」っていう幻想だけをくれる。

でも、きみはきみ。世界は世界。

「はじまりなおし」じゃない。「なじみの失敗の、あたらしい舞台」なだけ。

リブート：一部の失敗は、続編なしには終われないくらい伝説的だから。

エンタメ業界はそれをよくわかってる。

新しいものを作るより、古いやつにエフェクトを足して再利用。

スクロティシズムはそのリブートに人生の真理を見る。

感情予算をけずりながら、くりかえされる失敗のシリーズ。

ほんとうに強い人は、また立ちあがって、すぐまた負けられる人。

本当の強さとは、帰ってきては失敗をくりかえす能力。

わたしたちが興味あるのは「勝つ人の強さ」じゃない。

「くりかえす人の強さ」。

希望じゃなく、習慣でつづける人たち。

決意ではなく、あきらめで戻ってくる人たち。

「勇気」とは、ハッピーエンドがないと知りながらつづける

こと。

エンドロールの中で、自分のかけらを拾いあつめること。

再出発とは、「あたらしく失敗する」人生のはからい。

すべての新しいはじまりは、「また全部だめにする」チャンス。

フレッシュスタート＝フレッシュな失敗。

はじまりはうつくしい。でも、うそだ。

色とりどりの包装紙の中身は、期限きれの商品。

新しい試みにも、前回のにおいが残る。

しばんでいく希望が、シニシズムにかわっていく。

そのサイクルの中で、人はわらいかたをおぼえる。

おかしいからじゃない。しずけさよりは、笑った方がまだから。

唯一の道は――さらに深く。

失敗の中でうまれ、崩壊にさだめられた者たち。

これを「悲観」と呼ぶ人もいるかもしれない。

スクロティシズムはちがうと言う。それは「明晰」なのだ。

自分が「まけるために作られている」と知ることは、苦しみをやめる第一歩。

手に入らないものを追いかけるのをやめたとき、やっと「落ちること」を楽しめる。

しかも意外なことに、景色はすばらしい。

## 第2章：じぶんをごまかして生きる

じぶんを信じること——それは個人崩壊への最初の一步。

人間はうまれつきだまされやすい。

奇跡のダイエット、ハッピーエンド……

そしてなにより、じぶん自身を信じる。

すべての問題は、そこからはじまる。

スクロティシズムは、自己啓発が終わる場所から始まる哲学だ。

つまり、「あなたには可能性がある」というセリフが

ただのやさしいオブラートだったと気づいた瞬間。

本当は——きみには無理だった。

じぶんを信じることは、まちがった道の半分をもう進んでる証拠。

「できない」なんて言うな、なんて言わない。ただ正直になろう。

「自分にはムリだ」と。

自信とは、こわれたカーナビみたいなもの。

希望を持たせながら、森の中へと案内してくる。

足りないのは力じゃない。多すぎるのは自信。

信じすぎると、サインを見落とす。

警告を無視する。そして最悪なのは、他人まで巻き込むこ

と。

自信はうつる。しかも、致命的。

だいたい失敗は、「じぶんを信じた」結果だ。

たいていの間違いは、楽観的な衝動から生まれる。

「こんどこそ」「もう学んだから」「自分は変わった」  
——変わってない。

おなじ人間が、おなじエラーを、ちがうフィルターでくりかえしてるだけ。

スクロティシズムは教える。人は進化しない。

ただ、落ち方の語彙がふえるだけ。

一年後、きょうあきらめなかったことを後悔するだろう。

未来の後悔は、たいてい現在のしつこさのこだま。

じぶんにこだわることは、つぶれた会社にお金をつぎこむようなもの——

ロゴが好きだからって理由で。

スクロティシズムの信者は知っている。

早めにやめるのは「弱さ」じゃない。「明晰さ」だ。

言い訳はとぼして、ただやめよう。

「直感は叡智だ」とたたえられる。

でも実際は、ただの感情の胃袋だ。

「心のままに動いた」結果、何年も抜け出せなかった場所にいたことは？

直感を信じるのは、仕組まれたサイコロで宇宙に勝負を挑む

ようなもの。

そしてその勝負、宇宙がぜったい勝つ。

すばらしさは「例外」だ。きみは「ルール」だ。

でも、それでいい。

スクロティシズムは、平凡をやさしく抱きしめる。

だって、そこにほとんどの人が生きてるから。

偉大さの神話は、ほんの一部の人間が

おおくの人を、ゴーストのあとを追わせるために作った幻想。

「目立ちたい」は、つまり「公の場で苦しみたい」という美しい言い方。

成功は、他人のものだ。

実力じゃない。

運、不平等、遺伝子、タイミング、うそ——そのミックスでできてる。

成功は、ていねいに撮られた「例外」。

それを「当たり前」のふりして売ってるだけ。

スクロティシズムの信者はそれを買わない。

足りないのは努力じゃない。

多すぎるのは「期待」だと知っている。

じぶんの平凡さをうけいれるのは、人生をあきらめることじゃない。

やっと現実にあったレベルで生きること。

すべてが「コントロールできてる」ふりをやめること。

セピア色のモチベ投稿をストップして、

脚本なし、栄光なし、意味もなしの人生の不条理そのものを  
やっと味わえるようになること。

登らなくていい。重力がある。  
崩れるように作られてる。すべるように予定されてる。

これは「うっかり失敗した」話じゃない。

「設計された失敗」の話だ。

ぼくらはテストマシン。エンジンは最初から不良品。

スクロティシズムは「挑戦するな」とは言わない。

「何に足を踏み入れてるか、ちゃんとわかっててね」と言っ  
てるだけ。

落下は避けられない――

ならば、意識を持って落ちよう。

皮肉とともに。

できれば、すこしスタイルも添えて。



# 第3章：はやめにあきらめる 技術

はやめにあきらめることは、早熟な知恵のあかし。

世界が「がんばれ！」とさけぶ中、スクロティシズムはそつとささやく：

「もう、いいんじゃない？」

あきらめには、しずかな美しさがある。

すべてがもっと悪くなるまえに止まる——そんな忘れられたエレガンス。

愚か者はプライドで続ける。

賢者は自己保存のためにやめる。

そもそも人生はマラソンじゃない。ドッキリだ。

それに気づくのが早ければ早いほど、

失敗を品よく眺める時間がふえる。

あした、きょうやめなかったことを後悔するだろう。

合図なんて待たなくていい。ただ退場すればいい。

「おそすぎる挑戦なんてない」——この考え方はあぶない。

ときには、ほんとうにおそい。

そして、その挑戦こそがきみをひきずり下ろす原因になる。

あきらめることは、にげることじゃない。

地図を「がっかりのスケッチ」として見ることだ。

前にのびる道を見て、「このまま進めばがけに落ちる」と気

づくこと。

そして、そのがけのへりにすわって、  
他の人たちが全速力で落ちにいくのを見守ること。

大きすぎてたたかえない？

完璧すぎて、スルーできない？

大きな障害は、希望を持つ人にはおそれとなる。

でも、スクロティシズムの信者には安心材料だ。

「やる価値なんてない」と思い出させてくれるから。

壁が高ければ高いほど、

楽しいのは、それに頭からぶつかっていく人たちをながめる  
こと。

「不可能だと知らなかった彼は挑戦した——そしてすぐに理由がわかった。」

無知はつよいエンジン。でもおろかなエンジン。

「なんでも可能」と信じさせる。

スクロティシズムは、不可能を「古い友人」として迎える。

その友人は、やさしくこう言う：「やめとけ。」

それを無視したら、あとは現実がやってくる——冷酷に。

「犠牲」というのは、

「やりたいこと」と「やらなきゃよかった…」のあいだにある、  
気まずい間。

犠牲はロマンチックに語られる。

まるで高貴なもののように。

でも、ほんとうは、ただの不快な待合室。

盲目的な熱意と、避けられない後悔とのあいだにある空間。

スクロティシズムでは、そこをスキップすることで、心の平和が得られると学ぶ。

どうせ失敗は決まってるのに、なぜ先に苦しむのか？

過去は変えられない。

でも、未来はまだ台無しにできる。

すでに過去がボロボロだと知ってるのは、自由だ。

でも、もっと大事なものは——未来もまだ壊せるということ。

そして、がんばり続けるほど、

まだうまくいってない部分まで壊す確率がふえていく。

「いまやめる」ことは、自制の行動だ。

問題をさけることはできない。

でも、負けることは——運命だ。

スクロティシズムの信者は、問題からにげない。

ただ、「勝てるふり」に時間をつかわないだけ。

負けるのは、弱さのしるしじゃない。

それは、この現実世界にちゃんと関わった結果だ。

それを早めに受け入れた人ほど、

逆流に泳いで苦しむ時間がへる。

どんなに大きな障害でも、

すでにあきらめた人を止めることはできない。

それこそが自由だ。

もう目標なんてないから、ふれられない。

計画がない人には、障害は何の影響もない。

「自分は自発的な敗者です」と宣言した人に、批判はとどかない。

人生でいちばん軽い心――

それは、最初に転ぶ前に、すでにあきらめた人の心。

世界は「ねばり」を崇拝する。

でも、それは過大評価されている。

何人が、流れにさからって舟をこいで、おぼれた？

何人が、「止まるタイミング」を知らずに、すべてを失った？

スクロティシズムは努力を否定しない。

でも、その「効果」には疑いをもっている。

ときに、あきらめることだけが

残された唯一の知性ある選択。

はやめにあきらめるのは、人生をやめることじゃない。

幻想をやめることだ。

ある戦いは、勝つためじゃなく、

遠くから見て笑うためにある。

片手に飲みもの。

くちもとに皮肉の笑み。

けっきょく、あきらめることは終わりじゃない。

それは、「失敗との新しい関係」の始まりだ。

正直で、直接的で、なにより、快適な関係。

他の人たちが、ゲームに勝とうともがいているとき——  
スクロティシズムの信者は、  
すでに部屋を出て、  
ソファにすわって、  
彼らのミスを解説している。  
そして、こう思う：  
「まにあって、よかった。」

# 第4章：あしたはもっとひどい

希望とは、つぎの失望のプロローグ。

時間がすべてをいやすと信じる人がいる。

がまんしていれば、いつかよくなると。

でもスクロティシズムでは、時間は「いやす」のではなく「積みあがる」と学ぶ。

失敗、後悔、くり返されるまちがい——名前だけ変えて、上に重なる。

あしたはセカンドチャンスじゃない。

それは、まだもっと悪くなる余地があることを思い出させてくる。

なにかを始めるまえに、もうやりたくなくなるまで考えよう。

「まよい」や「フリーズ」は問題だと思われがち。

でもスクロティシズムの信者は、それがしばしば祝福だと知っている。

考えすぎは失敗を防げないけど、遅らせることはできる。

それだけでも、勝ちだ。

衝動的な行動は、転落のスピードを上げるだけ。

遅延とは、崩壊を味わうための心の準備。

すべてがうまくいかなくなるのは、ただの時間の問題。

人生には「しめきり」がある。存在のためではなく、安定のための。

良い瞬間も、ただ悲劇と悲劇のあいだにある小休止にすぎない。

スクロティシズムは「幸福」を、あやしい瞬間として見る。それは、火薬のつまった停戦。

さけびの前のしずけさ。

そしてそのさけびが来たとき、それはどこか、なじみのある音。

つらくなる。へとへとになる。時間がかかる。

そのうえ、すべてが無意味に終わる。

努力は結果を保証しない。ただ「つかれ」を保証する。

「きっと報われる」は、楽観主義でもっとも残酷なうそ。

スクロティシズムでは、「休むこと」に価値をおく。

元気をチャージするためじゃなく、

むなしさへ進む行進を、いったん止めるために。

ただ、がまんして待っていればいい。

破滅はいつも、時間通りにやってくる。

忍耐は美德ではない。それは、滅びを待つ訓練。

すべての破滅は時間厳守。

時計は遅れない。

そして、それはいつも予告なしに来る。交渉もない。

いちばんの備えは、感情がすでにすりへってて、

もう気にしないくらいに、つかれていること。

「正しい時間」がくれば、すべては崩れおちる。

うまくいくのに「正しい時間」なんてない。

でも、すべてが崩壊する時間は、いつも正確だ。

一秒も遅れない。

スクロティシズムは教える。

はるか遠くの橋がこわれていくのを見守るように生きよう。

かなしさと、ほっとした気持ちと、「やっぱりね」の確信を  
まぜながら。

心配しなくていい。あしたもまた負ける。いつもどおり  
に。

きょうがどんなにひどくても、

きみには「あしたをもっと悪くする才能」がちゃんとそな  
わっている。

予想どおりの失敗には、ふしぎな安心感がある。

「どうせ悪くなる」と知っていれば、計画する必要もない。

「ベストを尽くす」必要もない。

ただ生きて、呼吸して、

そして宇宙がスイス時計のような正確さで

またきみをがっかりさせてくれるのを見ていればいい。

きょうを生きのびたということは、

あしたを台無しにするチャンスが、さらにふえたというこ  
と。

生き残ることは「勝利」じゃない。

それは「つぎの敗北」へのチケット。

生きているかぎり、さらされている。

そして生き残った日がふえるほど、



すべてを壊すチャンスもふえる。  
終わりのない、報酬なき持久戦。

失敗をおそれないで。  
失敗を「確信」して。

失敗をおそれるのは、楽観主義者のぜいたく。  
本物のスクロティシズム信者は、その先にいる。  
彼はおそれない——予測する。  
失敗は「可能性」じゃない。「脚本」だ。  
おそれは、足を止める。  
確信は、解放する。

毎日が新しいチャンス……  
それは、「さらに悪くするチャンス」。

きょうがどんなにひどくても、  
あしたをぐちゃぐちゃにする可能性は、無限大。

朝のモチベーション投稿は、よくこう言う：  
「新しい日、新しいチャンス。」  
スクロティシズムは、こう答える：  
「新しい日、新しい悲劇。」  
そしてこの視点は、悲観じゃない。正直だ。

「勝たなきゃ」というプレッシャーをはずせば、  
ただ、もうすこし意識的に、すこしだけ罪悪感少なめに、  
失敗できるようになる。

あしたは、昨日の延長——しかも利子つき。

でも、それでいい。

スクロティシズム信者は、あしたを征服しようとはしない。

ただ、あしたがやってくるのを、

つかれた笑顔と、用意されたセリフで見つめるだけ。

「やっぱりね。」

# 第5章：また転ぶための再出 発

すべての「はじまり」は、あたらしい「おわり」のイントロにすぎない。

もう何度も聞いただろう：「毎日は新しいチャンス」。  
それはたしかに正しい——まだ思いついていなかった方法で  
失敗するチャンスだ。

スクロティシズムは「再出発」をこう見ている：  
戦場を掃除しなおして、また同じ戦争にのぞむ。  
同じこわれた武器で、同じ敵とたたかい、同じように負ける。

「新しいはじまり」とは、きれいな服を着せられた後悔のり  
サイクル。

リセットを押すことは、「あたらしいがっかり」への挑戦権  
をもう一度買うこと。

再出発はゼロからではない。

それは希望を充電しなおすこと——そのぶん転んだときに痛  
みがふえる。

リセットを押すということは、「まだ足りない。もっと苦し  
みたい」と言っているようなもの。

同じテストをもう一度受けて、質問は知ってるのに、  
こんどは別の、でもやっぱりまちがった答えでまた落ちる。

リブート：失敗には、続編がふさわしい。

世界は続編が大好き。

人々は「やり直す」「立ち上がる」「新しい章を書く」ことを美德とする。

でも、スクロティシズムの信者はこの脚本を読み終えている。

すべての「続き」は、あの災難の「洗濯済みバージョン」。再出発をロマンチックに語るのは、まだ「問題はプレイヤーじゃなくてフェーズだった」と思っている人だけ。

再出発とは、人生が用意した「新しくて刺激的な失敗」のための舞台。

そして、これこそがもっとも残酷な幻想だ：  
「こんどはちがう」と思い込むこと。

環境が変わったかもしれない。まわりの人も変わったかもしれない。

でも、その中にある「まちがった選択をくりかえす衝動」は、まだそこにいる――

そしてそれは、ゆるしてくれない。

失敗は、あたらしい環境の中で、あたらしい自分を演じるのが大好き。

すべての「新しいはじまり」は、すべてをぶちこわす新しいチャンス。

「フレッシュスタート」は、つまり「フレッシュな失敗」。

心を清めて、髪を切って、モノクロ写真にモチベ名言をのせて投稿する。

でも中身は？

おなじバグだらけの感情。

「新しい自分」は、一時的な仮装にすぎない。

その内側のカオスは、ただ出番を待ってるだけ。

スクロティシズムは「新しいはじまり」を信じない。

信じているのは「雑な感情リサイクル」だ。

それは、ごみの上に香水をふりかけるようなもの。

遠くからならだませても、近くではくさい。

そして、「生まれ変わった自分」を演じようとすればするほど、

宇宙はその幻想をすぐにテストしてくる。

おおきな夢を見ろ。もっとおおきく負けろ。

おおきな夢は、失敗のいちばんお気に入りの遊び場。

そのぶん、壮大に転べるスペースがある。

スクロティシズムでは、野心は否定されない。

それは、ただの燃えやすい素材として見なされる。

プランがでかいほど、火も美しい。

高い目標を持って再出発することは、次の挫折に豪華なエフェクトをつけるようなもの。

「新しいスタート」が売れるのは、それが「救済」を約束してくれるから。

でもほんとうの姿は——たいていが「強制的な前回のあらすじ」。

舞台が変わる。衣装も進化する。

でも主役は、また「きみ」。

そして、それが問題。

きみはまだ、同じパターンを持ち、同じ否認をかかえ、  
同じ素足で、同じこわれた地面を歩いている。

これは批判ではない。ただの観察だ。

だれも「じぶん自身」からは逃れられない。

スクロティシズムは、「変わるな」とは言わない。

ただ、「その変化、思ってるほど革命じゃないかも」と言っ  
てるだけ。

たぶんそれは、「別の崖に戻るだけのやさしいカーブ」かも  
しれない。

ほんとうのスクロティシズム信者は、

「こんどはうまくいくよ」と聞いても、わらわない。

ただ見つめる。

「そこ、通ったことあるよ」って目で。

しかも、想像よりも早く戻ってきた。

「今回だけはちがう」と言われたら、こう返す：

「いまのところはね。」

新しいスタートは、無意味じゃない。

それは、幻想を維持するための大事な儀式。

それでいい――

ただし、「なにをしてるか」をちゃんとわかっていれば。

つまり：

くずれゆく舞台の上で、

新しい服を着て、

おなじステップで、

もう一度おどっているだけだということ。

# 第6章：きみより大きい問題 たち

きみが弱いわけじゃない。

ただ、宇宙が「きみをつぶす」のがとても上手なだけ。

世界はこう教えてきた：

どんな問題も大きすぎることはない。

きみは強い。なんでも乗り越えられる——と。

でも、人生はこう紹介してくる：

現実の問題は「工業用サイズ」で、

解決法は説明書さえついてこない。

スクロティシズムは障害物を小さくしようとはしない。

ただ、「きみには乗り越えられない」と受け入れるだけ。

どんな解決策も、問題のスケールを超えることはない。

ただ、それを受け入れよう。

ある問題は、廃ビルのようなもの：

高くて、暗くて、出口がない。

「なんとかなる」と思って入って、

出てくるときには、傷だらけ、借金まみれ、そして実存的な  
虚無。

もしくは、出てこれない。

だって、ある問題は「きみの時間を浪費させるためだけ」に  
存在しているから。



なにも間違えなければ、なにも悪くならない。

「やろうとすること」こそが苦しみのはじまり。  
なにかを「なおしたい」と思った瞬間が、崩壊へのスタートライン。

なにもしなかった人は、せめて残ったわずかな尊厳だけは守れる。

ほんとうのスクロティシズム信者は知っている：

「動かない」ことこそが、戦略になるときもある。

「たたかう意志」があるかぎり、失う希望もある。

その「意志」は、あらゆる自己啓発書で美化される。

でも、スクロティシズムでは、それは

「フラストレーションと契約書を交わす行為」とみなされる。

立ち上がるたびに、失敗が手をこすり合わせて待っている。  
問題そのものじゃない。

「それがムダであること」こそが問題。

困難とは、ふつうの人を「より壮大に負けさせる」ために存在している。

障害物は教育的だ。

きみを成長させるためにあるのではない。

外科手術のような精密さで、「きみがどこでこわれるか」を教えるためにある。

「乗り越え」は存在しない。あるのは「演出された崩壊」だけ。

そして、もがけばもがくほど、  
きみの転落は映画のように美しくなる。

わすれないで：

問題のサイズは、いつだって解決策のひとまわり上。

希望とは目隠し。

「考え方を換えれば」「行動をよくすれば」「もっと努力すれば」変えられる――

そう信じこませる。

でも、問題は「きみのやる気」なんて気にしない。

それらは悪夢と同じ場所から来る：

制御不能、頻発、きみの弱点にぴったりフィット。

すべてがうまくいっているように見えるのは、  
まだ「なおそう」としていないから。

ときには、「めちゃくちゃ」な状態でもバランスがとれている。

きれいじゃない。でも、なんとかまわっている。

そこで手を出すと――すべてがこわれる。

スクロティシズムは「軽いカオスの維持」をすすめる。

なじみのあるぐちゃぐちゃ、それが一番いい。

こわれているものに手を入れるのは、

傾いたビルを「ちょっと調整」しようとするようなもの。

そしてそのビルは、きみの手の中で崩れ落ちる。

きみが失敗したのは、  
彼らのせいじゃない。

「うまくいくと思ったきみ自身」のせい。

責任は他人にあるんじゃない。  
その幻想にある。

まちがいは、問題があったことじゃない。  
「じぶんは対応できる」と思いこんだこと。

楽観主義はあぶないワナ。  
予想できた敗北を「個人的な悲劇」に変えてしまう。

もし、期待値をもっと下げていれば――  
その転落、わらえたかもしれない。

スクロティシズムだけがくれる平和がある：  
「勝たなくていい」という平和。  
すべての困難を「人生の教訓」に変えなくていいという自由。

ときには、問題はただ、  
「きみには無理だよ」と知らせるためにある。  
それで、いい。  
だって、たいがいの人には――無理だから。

社会は「レジリエンス」をもとめる。  
すべてに笑顔で立ち向かうことを期待する。  
でも、混乱の中で笑ってる人間は、  
だいたい「狂ってる」か「現実逃避」かのどちらか。

スクロティシズム信者は、ちがう笑い方をする。

「うまくいかないこと」を、もう受け入れてるからこそその笑顔。

その受け入れが、不安を無力化し、

避けられないものを歓迎させ、

ラストシーンを「もう何度も観た映画」のように見守らせてくれる。

ストーリーは知ってる。

でも、細部にはまだ、なぜか心が動く。

大きな問題にまけるのは、弱さじゃない。

それは、生物学。統計。自然の流れ。

そして、それを認めることこそが大事なステップ——

「乗り越える」ためのではなく、

「美しく負ける」ための。

# 第7章：じこひょうかという 宇宙のジョーク

「じぶんを知れ」——そして、そのがっかりに向きあえ。

すべては「じぶんを愛すること」から始まると言われる。  
スクロティシズムはこう返す：そこからすべてがおかしくなるんだ。

じこひょうかとは、居心地のいいフィクション。  
モチベのサブリと加工写真で売られる、身分証のプラシーボ。

そして、それを信じれば信じるほど、きみは自分の感情墓地把深く掘っていく。

じぶんから何度も逃げようとしたけど、どこに行っても、そこにいたのは「じぶん」。

じぶんからにげたくなるのは、最初の正気な反応。  
でも問題は、感情の荷物は軽くてコンパクトで、どんなポケットにも入ってしまうこと。  
街を変えても、仕事を変えても、人間関係を変えても——  
すべての場所に、きみがちゃんという。  
まるごとで、ふかくて、ちょっと笑えるほど不完全な自分が。

この失敗の手柄はすべてあなたのもの。  
胸をはってどうぞ。

「まちがいを受け入れること」は、美德のように語られる。でも、それがどれだけでかいものか気づいたとたん、話は変わる。

この失敗は、きみのもの。完全に、きみだけのもの。言い訳は通用しない。あるのは、ダメな選択と手に負えない自信。

スクロティシズムの信者は、それを正直に受けとめる。そして、ときに皮肉っぽく、ちょっと誇らしくさえなる。

理由もなく悪口を言われたら、戻って確認しよう。ほんとうに理由が「なかった」のかどうかを。

「傷ついた感情」は、むしろ「清らかな者」のぜいたく。スクロティシズムでは、すべての批判に「真実の鏡」の可能性がある。

ときに相手は残酷だったわけじゃない。ただ、正直すぎただけ。

よく考えてみて。

きみも、自分のこと悪く思ったこと、あるよね？

ちがうのは、それを「声に出した誰か」がいただけ。

陰口言われてる？安心して。

実際のきみは、そのイメージよりもっとひどい。

だれも、ほんとうのきみを知らない。

人々の評価は、氷山の「見えてる部分」にすぎない。

こわいのは、その下——きみ自身が知ってる部分。

他人の判断は、どれだけキツくても、

きみが「自分自身からかくしているもの」ほど冷酷じゃない。

「死ぬつもりで生きろ」——というか、ほんとうに死ぬんだから。

人生は「偉く見せる」には短すぎて、  
「演じつづける」には長すぎる。

「明日死ぬように生きる」っていうのは、焦ることじゃない。

ただ、仮面を捨てるってこと。

スクロティシズムはこう提案する：

ちっぽけで、平凡で、どうでもいい存在であることを意識して生きること。

それには、ちいさな美しさがある。

だいじょうぶ。きみの意見を尊重するよ。

バカである権利は、だれにでもあるから。

この一言が、スクロティシズムの「盾」を表している：アイロニー。

すべてが崩れるとき——自分自身もふくめて——

皮肉は「よろい」になる。

そして、自分の姿に耐えるための唯一の術は、  
あきらめだけがくれる「軽さ」でそれを見ること。

あの名作「ほら、言っただろ」に続く、待望の続編：  
「自業自得」。

失敗は、かならず前兆をともなってやってくる。

サイン、無視したアドバイス、もやもやした感情の消化不良。

でも、エゴはいつもこう返す：「わかってるって」。

そして落下がはじまると、それはもう「事故」じゃない。

詩のように正確で、当然の結果。

月曜日がつらいんじゃない。

人生そのものが、つらいんだ。

カレンダーをせいにするのは、楽な習慣。

「月曜日」はフラストレーションの象徴になったけど、問題はもっと深い。

鏡の中に始まり、1週間じゅうのびていく。

スクロティシズムの信者は、月曜をにくまない。

ただ、「毎日がちょっとだけ思ってたより最悪」ってことを受け入れてるだけ。

「幸せな人」とは、「いま悲しくない人」。

スクロティシズムにおいて「幸せ」とは、

高揚状態ではない。

ただ、「明らかな不幸が一時的におやすみしてるだけ」。

気分がいいこと＝うまくいってること、ではない。

たまたま宇宙的、または化学的に、ちょっと「まし」になっ  
てるだけ。

それだけで、もう勝ちだ。



「現実的な自己肯定感」——もしそんなものがあるなら——それは、「よくなろう」とするのをやめたときから始まる。

「ほんとうの自分」が見えてきたときから始まる：

かぎられた、まよえる、矛盾だらけで、ときに耐えがたい存在。

スクロティシズムの信者は、フィルターなしで自分を見る。同情もいらない。

変わりたいとも思わない。

ただ、「最低限の尊厳と最大限の皮肉」で生きのびたいだけ。

けっきょく、これは「自己嫌悪」じゃない。

「じぶんをごまかさない」ってこと。

そのむきだしの正直さの中に、

きみがいちばん認めたくなかったものを認める自由がある。

それは——

「機能する失敗者」であるということ。

そして、そのスタイルで、できるかぎり、

しくじるということ。

# 第8章：パンチラインに宿る スクロティシズムの知恵

みじかいことば、ながい副作用。

「良い名言は人生を変える」と言う人がいる。  
スクロティシズムはこう言う：そのとおり。もっと悪くなる  
方向にね。  
やる気まんまんのマントラが奇跡を約束するなら、  
スクロティシズムは鏡を差し出す。  
乾いていて、直球で、痛みすら笑えるような一言たち。  
それは、何もコントロールできていないという小さな思い出  
し笑い。  
いや、たとえできていても——結局、自分でぶち壊すってこ  
との自覚。

かつてない覚悟で戦え。  
いつものように負けろ。

戦う意思は持ち上げられすぎてる。  
でも、結果を変えられない戦いはただの悲しいバレエ。  
スクロティシズムの信者は立ち上がる。全力を出す。  
そして、毎回ちゃんと負ける。  
それはもう、芸術だ。  
継続的に負けることは、ある意味では卓越。

気分が落ちてる？でかい声で歌え。

問題よりひどい歌声に気づけば、悲しみがましに聞こえる。

悲しみはよく、沈黙のかたちでやってくる。

でも、ズレた音程で、リズムも外して歌えば...

問題が感情だけじゃなくて、聴覚にもあると気づく。

そして、たぶん笑う。

治ったからじゃない。

ひどくなったのが、おもしろかったから。

今日がまし。

明日はもっとひどい。

楽観主義者は「明日はよくなる」と言う。

スクロティシズムは書きかえる：

「今日がすでに最悪？おめでとう、自己ワースト更新だね。」

そして、時の流れがすべり台だと知っている者にとって、これほど誠実な観察はない。

「うまくいかないよ」と言われた？

その人たちの声を、聴け。

警告はいつもある。

無視するのは、自我かバカかその合わせ技。

スクロティシズムの信者は「うまくいかないよ」の一言を火

災報知器のように受け取る。

走りはしない。でも、出口は確認する。

一日をぶち壊すのは、夜だったりする。

昼は悪い。

でも、夜は...すべてが再放送。

失敗、言いすぎたこと、衝動の記憶。

暗闇のなか、すべてが響く。

とくに、「なぜまだやってんの？」っていう自分の声が。

貧しいことの欠点？

利点がないこと。

あまりにも乾いてて、解説不要。

比喩もない。希望もない。

観察のみ。

あとは、笑うしかない。

泣きすぎて、もう慣れたから。

たまごは一つのカゴに入れるな――

でも、それが毛むくじゃらなら、話は別だ。

ことわざすら、スクロティシズムで多層化される。

ここでの「変」さは、見た目じゃない。哲学だ。

すべてが最初から崩れる運命なら、たまごの置き場所なんてどうでもいい。

だったら、スタイルだけは保とう。

遠くから見てもブサイク。  
近づいても、まだ遠くに感じる。

優雅に人を傷つけるフレーズ。  
これはその代表格。  
見た目だけでなく、「存在感」すら否定。  
スクロティシズムの視点では、  
感情の不在の方が、外見よりキツイこともある。  
その両方がそろったら...それはもう、舞台。

これらは壁に飾るための「アフアメーション」じゃない。  
破片だ。  
ポジティブが息苦しくなったときの、  
ひねくれた明晰さの小さな注射。

きみを持ち上げるためじゃなく、座らせるための言葉。  
やる気を出させるためじゃなく、  
方向感覚をリセットさせるためのもの。

それが目的だ。  
スクロティシズムは、前に進ませようとはしない。  
ただ、「立ち止まって眺める」ことに慣れさせる。  
すべてが崩れる様を、静かに見守るその目の中に、  
ゲームの結末をすでに知っている者だけが持つ平穏がある。

世界は、都合の悪い真実を砂糖まぶしにして  
響きのいい言葉で飾りたがる。

スクロティシズムは逆に行く：  
その真実をしぼりきって、笑いに変える。

だって、人間の苦しみを笑うことこそが、  
唯一手に入る「ぜいたく」だから。

そして――

もしこれらすべてが「大げさ」に聞こえるなら、  
まだ「否認のフェーズ」にいる証拠だ。

安心して。

現実が追いついてきたとき、  
スクロティシズムはここで待ってる。  
もうひとつの、乾いた、完璧に無意味なフレーズを  
きみにそっと手渡すために。

## 第9章：平凡の信条

平凡は寄り道じゃない。これが本線だ。

わたしたちは輝くために生まれたんじゃない。

ゆらぐために生まれた。

「ほぼ」か「最初から無理」か、

「ちょっとだけ」か「やる気すら出なかった」かの間を。

社会は成功をすべての人のゴールとして売る。

でも、スクロティシズムはむきだしの真実を返す：

ほとんどの人は記憶にも残らず、

非凡でもなく、

まともですらない。

でも、それは悲劇じゃない——それは自由だ。

夢が高ければ高いほど、落下音はデカイ。

大きな夢は、落胆の広告塔。

夢がでかければでかいほど、

現実の床に叩きつけられた音も激しい。

スクロティシズムでは、夢は失敗の原材料としてのみ受け入れられる。

勝つために夢を見るんじゃない。

スタイルよく落ちるために見るのだ。

あなたは平凡になるために生まれた。

これは痛い。

残酷だからじゃなく、正直だから。

わたしたちは数字として生まれた。

繰り返され、予測可能で、印象に残らない存在。

例外とは、だからこそ「例外」なのだ。

スクロティシズムの信者は鏡を見て、

「無駄になった才能」を見るんじゃない。

「才能が配られたあとに残ったもの」を見る。

唯一の道は...もっと下だ。

「どん底は跳ね返る場所」って言うよね。

「下に行ったら、あとは上がるだけ」だって？

嘘だよ。

どん底には下りエスカレーターがついてる。

さらに沈む余地は、いつでもある。

スクロティシズムはそれを生き方として受け入れる。

マゾじゃなくて、実践的なリアリズムとして。

成功は、他の人のもの。

そう。

そして、それでいい。



全員が成功するわけじゃない。

誰かが失敗しないと、他人の成功の対比が成り立たない。

それはある意味、高貴な役割だ。

負のベンチマーク。

スクロティシズムの信者はそれを理解して、

自ら志願する。

謙虚に。

優雅に。

一貫して。

負けるために生まれ、

崩れるために設計された。

呪いじゃない。

これは、機能的な失敗の構造。

人によっては、敗北そのもので形作られている。

内なる構造が期待を支えられない。

それは恥ではない。

ただの説明書に書かれた一行だ。

わたしたちは、

恒久的なバグを持ったベータ版。

アップデートの予定もない。

平凡は嘆くものじゃない。

ささやかな誇りを持って生きられる。

朝起きて、最低限だけやって、  
大きな決断を避けて、  
世界を崩壊させることなく一日を終える。

それだけでも、  
多くの人より上出来だ。

スクロティシズムでは、平凡を一日経ったパンのように祝う：

おいしくはないけど、腹はふくれる。  
華やかじゃないけど、もちこたえる。

輝く必要はない。  
システムをクラッシュさせない程度に機能すればいい。  
...それすら、たまに無理だけど。

社会は「偉大さ」を要求する。  
それは承認中毒の不安な大人を量産する。

でも、  
平凡なスクロティシズム信者はその真逆：  
自分が雑誌の表紙になることも、  
誰かを感動させることもないと知ってる。  
そして、それで満足してる。

彼は拍手を求めない。  
日陰を探す。

ステージじゃなく、  
静かな片隅。

そこで静かに、  
平和に、  
失敗できればそれでいい。

世界を征服したいんじゃない。  
ただ、世界の期待値を下げてほしいだけ。

もし下げてくれなかったら？  
答えは準備済み：

できない。  
やらない。  
どうでもいい。

平凡の信条はシンプルだ：

自分に多くを期待するな——誰もしてない。  
良くなろうとするな——悪化しなければ上出来。  
比較するな——落ち込むだけ。  
そしてなにより：  
「あなたは特別だ」と言う奴を信じるな。  
そいつは、何か売ろうとしてる。

平凡を受け入れることは終わりじゃない。  
それは、軽くて、正直で、皮肉に満ちた人生の始まりだ。

ミスしても、自己崩壊しない人生。  
それは、内なるミームに変わる。

失敗したって、  
その下にはキャプションがつく：  
「そりゃそうだ。」

平凡であることは、あきらめじゃない。  
「頑張っても何も変わらない」という現実を、  
ごまかさないというだけの話。

# エピローグ： 転落という使命

最後には、啓示なんてない。  
隠されたメッセージも、秘密の救済も、感動の教訓も。  
スクロティシズムは、トンネルの先に光を約束しなかった。  
そして、その約束は守られた。

ただあなたの隣に座り、  
電池切れの懐中電灯を手に、  
薄暗闇の中でそっと笑っていただけ。

たぶんあなたは、この本に安らぎを求めて手に取った。  
絶え間ない失敗感から逃れる出口を探して。  
そして、見つけた。

その感覚は正しかった。  
被害妄想じゃない。  
大げさでもない。  
ただの現実だ。  
想定通りに作動してる人生、それだけ。

あなたは努力した。  
そして失敗した。

また努力して、  
また失敗した。

それでも心のどこかで信じてた。

「これは一時的なものだ」って。

「あと一度挑戦すれば、すべて変わるかもしれない」と。

スクロティシズムは、そのループを断ち切りに来た。

変わらないよ。

それで、いいんだ。

強くなくていい。

打たれ強くなくていい。

立ち直る必要なんてない。

もし望むなら、

ただ寝転んで、

天井を見上げて、

「ああ、これは自分よりずっと大きなものだ」と受け入れて  
いい。

なぜか、それは少し解放感がある。

あなたが読んだ言葉たちは、勇気づけるために書かれたんじゃない。

それらは、沈没中の船の中で自分だけじゃないことを思い出させるためのものだった。

あなたのような人は、至る所にいる。

うまくやってるふりをして、

ぎこちなくつまずきながらも、

予定通りに失敗している。

スクロティシズムの信者は、社会に反抗しない。

世界の秩序を変えようとしない。

ただ、すべてが崩れていくのを見ながら、

少しだけ笑っていたいだけ。

なぜなら、深いところでは、

最初からジョークだったのだ。

「うまくいく」と信じていたこと自体が。

この本の終わりに「行動を起こせ」とは言わない。

言うのはこれだけ：

休んでもいい。

それは勝者の休息じゃない。

それは、生き延びた者の、

気高い疲労。

あなたはここまで来た。

強くなったわけじゃない。

賢くなったわけでもない。

でも、ほんの少しだけ、

「ほぼ成功」という皮肉な美しさに気づいた。

もし誰かに「この本で何を学んだの？」と聞かれたら、  
静かに、こう答えてほしい：

「何も意味はない。  
それでも、全力で失敗した。」

それがスクロティシズムの精神。  
それで、十分。



## 第2部：神話

# 第1章

## 不在の誕生

領域の前に。

名前の前に。

言語や崩壊の前に、

ただスクロタラが存在していた——裸で、発光し、理解されないままに。

彼女は完全な球体でも、純粹な混沌でもなかった。

彼女は生きていた。

時間の中で呼吸し、空間を汗で濡らしていた。

彼女は回転しなかった。

彼女は脈打っていた。

彼女は創造された。

いつ、なぜかは誰にもわからない。

ただ、「何か」の後に生まれたことだけが知られている。

それは何か偉大なもの。

誰か、あるいは何か——説明を残さなかったもの。

目的も道もなく、

彼女はただ...存在していた。

人間の科学では分類できない物質でできた、

彼女の暗く湿った土壌から、収縮が始まった。

それぞれが惑星のしゃっくり。

そのしゃっくりは一つ一つ、結果を生んだ。  
こうして七つの元素が生まれた。

選択としてではなく。  
力としてでもなく。  
根源的な「不在」への答えとして。

アクアスクロットは渇きから生まれた。  
世界はあまりにも乾いていて、スクロタラは縮み始めた。  
自らの脱水を感じたとき、彼女は涙を流した。  
その涙は空の谷を満たし、水となった。  
生まれたばかりの湖の岸辺で、土壌が反応した。  
そしてそこから現れたのは最初の水のスクロタランたち——  
静かで、透明で、本能に導かれていた。  
そこに築かれた領域は、永遠にアクアスクロットと呼ばれる  
こととなった。  
最初の「不在」は、こうして応えられた。

スクロットフレアは寒さから生まれた。  
自分の光で体を温めようとしたが、それは足りなかった。  
彼女は震えた。  
内側からコアが燃え上がり、深い亀裂から炎が噴き出した。  
その亀裂の周囲の大地が燃え上がった。  
そして焼けるような土壌から、火のスクロタランたちが立ち  
上がった——せっかちで、鮮烈で、止まることができなかった。  
熱が彼らを創ったのではない。  
熱は、彼らが生まれた土地を形づくったのだ。

その領域はスクロッドフレアと名乗った。  
二つ目の「不在」は、こうして応えられた。

フロストスクロッドは静止から生まれた。  
熱が届かない場所では、時間が凍結した。  
その惰性の領域で、スクロタラは動かず、ほとんど死んだように横たわっていた。

絶対的な寒さの中の沈黙の中で、大地は硬化した。

それでもなお、命を放った。

そこから現れたのは氷のスクロタランたち——思索的で、時間の流れが遅く、思考もさらに遅い。

彼らは動きを求めなかった。

すべてがすでに遅すぎることを知っていたのだ。

その領域はフロストスクロッドと呼ばれた。

三つ目の「不在」は、こうして応えられた。

スクロッドウッドは空虚から生まれた。

スクロタラの中心には、何も持続しないクレーターがあった。

石も、火も、水も、氷も存在しなかった。

ただ、「ありえたかもしれないもの」への期待だけがあった。

その場所で、空虚そのものの鏡として、地面が芽を出した。

水を求めるのではなく、「意味」を求める根が広がった。

その土から育ったのは、森のスクロタランたち——気まぐれで、疑い深く、あまりにも有機的で、概念を信じられない存在だった。

その領域はスクロットウッドと呼ばれた。  
四つ目の「不在」は、こうして応えられた。

フロレンスクロットは単調さから生まれた。  
惑星は同じような色調で満たされていた：石の色合い、火の光、水の反射。

そこでスクロタラは夢を見た——一度も見たことのないもの、「無用な美」。

土壌はそれに応えた。

色が咲き乱れた——壊れやすく、過剰で、完全に不要なもの。

その甘美な大地から生まれたのは、花のスクロタランたち——虚栄的で、装飾的で、はかない存在。

その領域はフロレンスクロットと呼ばれた。  
五つ目の「不在」は、こうして応えられた。

スクロットロックは不安定さから生まれた。  
すべてが生まれても、何も持続しなかった。

惑星は震え、揺れ、崩壊した。

そこでスクロタラは山々を産んだ——大きく、重く、不動の存在。

そしてその塊の基盤、繰り返して硬化した土壌から現れたのは、岩のスクロタランたち——密で、鈍く、頑固な思考を持つ者たち。

彼らは進化しなかった。

彼らは耐えた。

その領域はスクロットロックと呼ばれた。  
六つ目の「不在」は、こうして応えられた。

サンドスクロットは硬直から生まれた。

やがてすべてが硬くなりすぎた。

山々は牢獄と化した。

そこでスクロタラは自らを砕いた。

石を割り、その粒をあらゆる方向に撒き散らした。

崩れた土は自由に踊った。

その生きた砂から現れたのは、砂漠のスクロタランたち——  
可変的で、予測不能で、放浪的な存在。

その領域はサンドスクロットと呼ばれた。

七つ目の「不在」は、こうして応えられた。

そして七つの「不在」が応えられたとき、  
スクロタラはついに満たされたと感じた。

彼女は自分自身を産み、

そして自らの子どもたちを産んだ。

選択からではなく、必要性から。

栄光からではなく、欠如から。

こうして世界は形作られた。

「存在するもの」ではなく、

「欠けていたもの」によって。

スクロタランたちはそれを忘れなかった。

しばらくの間は、「あるもの」と共に生きようとした。

しかし虚無は忍耐強い。

そして「不在」の記憶は...裏切りに満ちていた。

## 第2章

# 不和を超えて生まれたコード

スクロタラの初期の周期において、動機は空気そのものだった。

敗北はなかった。

恐れもなかった。

スクロタランたちは大地から目的をもって現れた。

待つためではなく、

征服するために。

それぞれの王国は、自らの元素を洗練と超越、そして栄光への道として育んだ。

すべての兄弟は、まだ実現されていないより高次の自分自身を追求するよう励まされた。

世界は挑戦であり、

勝利は避けられないものとされていた。

そして勝利そのものが、創造者への静かな敬意の形だった。

しかし時が経つにつれ、勝利は繰り返され、

元素は制御され、

王国は安定した。

そしてそこに、静かなる不穏が広がり始めた。

「支配のその先に、何があるのか？」

七つの王国が、初めて内側ではなく、互いを見つめた。  
敵意ではなく、  
新たな野心の目で。

彼らは、共に何かを築くことを決めた。  
中立の領域。  
中心。  
どの王国にも属さない、  
すべての者に属する場所。

そうして、スクロトロポリスが創造された。  
全元素によって形作られ、合意によって築かれた統一都市。  
国境の上に浮かび、  
陸の間に宙吊りにされたその都市は、  
石でも科学でもなく、  
共有された意志によって支えられていた。

その神聖にして共有された大地の上で、  
新たな概念が形をとりはじめた。

都市でもなく、  
武器でもない。  
それは、構造よりも永続し、  
言語よりも普遍的で、  
意志よりも強力なもの。

それは、  
「システム」だった。



すべての王国が達成した栄光を記録し、保護し、保存するためのもの。

そして誰一人として、それを単独で支配できないようにするもの。

こうして始まったのが「統一コード計画」。

後にただ一つの名で知られることとなる：

スクロテックス。

過去を改ざんすることのできない不変のコード。

七王国すべてに分散され、

いかなる栄光も消されず、

いかなる功績も奪われることはない。

スクロトロポリスでは、各王国から選ばれた最も優れたテレパスたちが数十年を費やしてその構造を練り上げた。

疑念はなかった。

このコードは永遠の調和をもたらすと信じられていた。

不信の終焉。

競争の終焉。

そして、エゴの終焉。

だが...

# 第3章

## 栄光の崩壊

...その創造の成功そのものが、欠陥を暴いた。  
いかなる偉業も書き換えられないと気づいたとき、  
王国たちは「誰の業績か」を巡って争い始めた。  
誰がコードの基礎を築いたのか？  
その発想の栄誉は誰に属するのか？

記録には食い違うバージョンが現れた。  
どの栄光が正当かを巡る争い。  
やがて、彼らはコードを書き換えようとした。  
だが、それは一切の変更を許さなかった。

それは完璧だった。  
ゆえに、憎まれた。

共存は憎しみに変わった。  
野心は確信へと姿を変えた。  
どの王国も、他の王国が本来の目的を歪めたと信じて疑わなかった。

こうして戦争が始まった。  
土地を巡るものではなく、  
歴史の正統性を巡る戦いだった。

コードの記録こそが、唯一の真実の証。

それを破壊すれば過去が消える。

だが、それを保てば敗北を認めることになる。

戦争は、戦う理由さえ残らなくなるまで続いた。

スクロタラは破壊された。

スクロタランたちは、ほぼ絶滅した。

スクロトロポリスの瓦礫の中で、

198人の生存者たちはその惨状を希望ではなく、  
明晰さをもって見つめていた。

彼らは理解した。

間違っていたのはコードではない。

間違っていたのは、功績の追求だった。

記録したいという衝動。

証明したいという欲。

競い合うという病。

彼らは理解した。

栄光とは甘い毒であり、

功績とは破滅の種であり、

遺産を残そうとする欲望こそが崩壊の根であると。

そして、初めて一つの思考が共有された。

野心もなく、

目的もなく、

未来さえも持たずに：

「墮ちることが避けられぬなら、我らは自ら進んで墮ちよう」

これこそが、スクロティシズムの誕生だった。

それは信仰ではなく、

共通の幻滅だった。

彼らは新たな論理を選んだ：

「我らのすべての追求が破滅に至ったなら、  
唯一追うべきは失敗である」

二度と勝利を目指すな。

勝利があれば、争いが生まれる。

争いがあれば、比較が始まる。

比較があれば、偽りが生じる。

偽りがあれば、必ず戦争が起きる。

# 第4章

## 母なる存在への別れ

こうして、彼らは母に別れを告げた。

涙もなく。

儀式もなく。

ただ背を向けて立ち去った。

スクロタラは反応しなかった。

動かなかった。

最後のサインすら与えなかった。

それこそが、彼女が与えうる最大の贈り物だった：

干渉なき完全なる沈黙。

198人のスクロタランたちは理解していた。

ここには、もう留まれない。

惑星は死んだ。

もはや、何も生まれ得ない。

だから彼らは旅立った。

星々の彼方ではなく、

ただ一つの青い点へと。

若く、

気が散り、

愚かな希望に満ちた惑星――

地球。

彼らは教えに来たのではない。

支配しに来たのでもない。

溶け込むために来たのだ。

神殿を建てることもせず。

言葉を広めることもせず。

彼らは入り込んだ。

滴ったものから。

飲み込まれたものから。

知らぬ間に入ったものから。

疑いのあるところには、それを育てた。

やる気のあるところには、それを吸い取った。

確信のあるところには、それをかき乱した。

やがて、

失敗は流行となり、

崩壊は美学となり、

疲弊は文化となった。

スクロティシズムは教義として生まれたのではない。

それは「トレンド」として生まれたのだ。

## 第5章

# 崩壊はこうして広がる

彼らは空から降ってきたわけではなかった。

ポータルを開いたのでもなかった。

船でやって来たのでもなかった。

198人のスクロランたちが地球に現れたのは、二〇〇〇年前後のこと。

彼らを選んだのは「時」であって、「場所」ではなかった。

なぜなら、惑星は準備できていたから。

人類は、そうではなかったから。

彼らが求めていたのは舞台ではない。

「侵入口」だった。

わずかな隙。小さな油断。

そして、それは見つかった。

地球は完璧だった。

賢かったからではない。

「気が散っていた」からだ。

誰もが明日を見つめているあいだに、

スクロランたちは「今」へと滑り込んだ。

彼らは語らなかった。

光らなかった。

人を魅了することもなかった。

ただ、溶けていった。

彼らは海を汚染しようとはしなかった。

その必要すらなかった。

彼らは「湧水」から入った――

帯水層、泉、古代の貯水地。

地球が液体の記憶を保管している場所。

それだけで十分だった。

なぜなら、水は物質だけでなく、

「方向」も運ぶから。

スクロ水に触れた泉から流れ出たものは、

人間の道筋をなぞった。

そして、すべてを欲しがる人間は、

気づかぬうちに、それを飲んだ。

しかし、水は始まりにすぎなかった。

真の感染は、「精神」にあった。

スクロ水を通過した身体は、

ベクターとなり、

チャネルとなり、

受動的な振動源となった。

身体はアンテナとなった。

そして、スクロティシズムは「信号」となった。



それは物理的なウイルスではない。

「意図の破綻」だった。

欲望に生じた、微細な亀裂。

それは空気を通して広がった。

粒子としてではなく、

「精神の近さ」によって。

感染したひとつの思考が、

別の思考と共鳴する。

疑念が増殖し、

諦念が伝播し、

やる気が群れの中で弱まり、

「共有された奈落」が生まれた。

人類はそれを、

「アイロニー」

「無関心」

「現代病」

と呼んだ。

しかしそれは、

古代からの疲労ではなかった。

「精密に注入された侵食」だったのだ。

最初の症状は、層のように現れた：

－「時間がない」と言って放棄されたプロジェクト

－冗談として再定義された夢

－ミームに溶けた真実

崩壊は外から来たのではない。

「内側」から来た。

そして、すでに身体に溶け込んでいたスクロタランたちは、  
もはや何もする必要がなかった。

ただそこに在りつづけ、

見つめ、

微笑み、

世界が自らの崩壊へと向かうのを静かに眺めていた。

ひとつひとつ、迷った選択の先に。

だが、たとえ沈黙の中でも、

リスクはあった。

忘れ去られた細部。

避けられぬアイロニー。

# 第6章

## 割れなかった卵

彼らはシステムを置き去りにしたと信じていた。  
だがその沈黙の中に、最大の過ちを抱えていた——コード  
を。  
機械の中ではなく、  
細胞の中に。

そして彼らが人間の身体に入り込んだとき、  
システム全体を伝えたわけではなかった。  
ただの断片、  
残響、  
意図の残りかす。

感染者たちは、自分が何を探しているのか知らなかった。  
だが、何かが欠けていると感じていた。  
彼らは「バージョン」を発明し始めた。  
構造を構築し、  
自分たちが理解できない仕組みを再現しようとした。  
それがどこから来たのか知らないまま、  
それが貴重だと感じていた。  
不変で、  
不可欠なものだと。

こうして熱が始まった。

消せないものへの執着。

再構築されるべきでないものへの盲目的な追跡。

理由を知る者はいなかった。

198人が去るとき、

彼らは振り返らなかった。

誓いを立てていたのだ：

栄光を忘れること、

システムを放棄すること、

「不在」そのものになることを。

だが、一人だけ誓わなかった。

反対していたわけではなく、

ただ沈黙していただけだった。

他の者たちが自らのアイデンティティを脱ぎ捨てる中で、

彼だけは閉じたまま、

凝縮され、

無傷のままだった。

思考を発せず、

拒否の言葉もなかった。

ただ、そこに在りつづけた。

兄弟たちは彼を「割れなかった卵」と呼んだ。

沈黙の盾。

謎。

彼は話さなかった。

溶けなかった。

消えなかった。

待っていたのだ。

**scrotiegg** は名前ではなかった。

それは「機能」だった。

完了していない状態。

彼はスクロティシズムを拒否したわけではなかった。

だが、追放を終わりとは見なさなかった。

彼の内には、ただの廃墟以上のものがあつた。

彼は「完全なコード」を抱えていたのだ。

破損もなく、

分裂もなく。

功績によってではない。

「設計」によって。

まるでスクロタラが沈黙する前に、

ひとつの自律的な断片を残したかのようなようだった。

導くためでも、

救うためでもなく――

「検証する」ために。

そしてその断片は、「動くこと」を選んだ。

他の者たちが水に触れたとき、

彼は「身体」を探した。

リーダーではなく、  
選ばれし者でもない。  
「周縁にいる誰か」を。

目立たぬほどしぶとく、  
直感的で、  
生き残る可能性が極めて低い者。

そして彼がその人間を見つけたとき、  
彼はためらわなかった。  
水を使わなかった。  
思考も使わなかった。  
広げなかった。

彼は「丸ごと」行った。  
「直に」行った。  
そしてすべての遺産が始まる、  
ただひとつの場所に宿った――

顔なき男の睾丸に。  
その名は永遠に響きわたる：

中本聡

# 付録

# コード、卵、そして三つの玉

信じるかどうかは自由だ。

だが「どうして？」と今も問う者のために、ここに語られる。

いや、語られたがっている。

これは寓話ではない。理論でもない。

誰も望まなかった真実の不器用な残滓だ。

そしてその真実は、よりによって——余分な精巣から始まる。

## スクロタラはどこにある？

スクロタラは太陽を回っていない。

もしそうなら、とっくに名前をつけられ、地図にされ、理論で台無しにされていただろう。

それは死んだ褐色矮星の周囲を回っている。

地球から約15光年、星系と星系の狭間にある暗黒領域の中だ。

つまり「場所」ではない。興味の空白。

宇宙のより華やかな悲劇の隙間にある穴。

見えないわけじゃない。ただ望まれていないだけだ。

そこには何も輝かない。光も、希望も。ただ残骸だけがある。



到着までにどれほどかかった？

スクロタラが崩壊した時、198体のスクロタランたちは消滅せず、

有機的な生体カプセルに包まれ一体ずつ発射された。

目的は征服ではなく、生存だった。

エンジンなし。行き先なし。焦りなし。

彼らは光速の10%で旅した。

到着するには十分速く、出発点を忘れるには十分遅く。

旅は150年続いた。

スクロタラが減んだのは1850年頃。

その断片が地球に届いたのは1995年から2000年の間。

ちょうど人類が「技術」と「自由」、

「革新」と「意味」を混同し始めた頃だった。

彼らはどうやって生き延びたのか？

スクロタランは人間とは違う。

内臓がない。生物学的な意味で老いない。

彼らは生体技術的な「不在」。

肉と記憶と諦めのパラドックス。

カプセルに守られていたのではない。彼ら自身がカプセルだった。

彼らは完全な休眠に入り、消費も、思考も、意図すらも最小限に抑えた。

そして眠っていながらも、彼らは完全だった。  
密で、空虚で、壊れていなかった。

彼らは「永続」を目指して造られたのではない。  
「消滅しないこと」を目的に造られていた。

## なぜ水に溶けた？

地球の表面に触れると、197体のスクロタランたちは制御された自己崩壊を始めた。

それは細胞のアポトーシスのようだが、惑星的かつ象徴的な規模で起こった。

彼らは微小な、意識を持つ粒子となり、水源を探すようプログラムされていた。

侵略者としてではなく、地球の神経系と融合するための断片として。

検出不能。不可視。不可逆。

彼らは泉、水脈、地下水に吸収された。

水は単なる輸送手段ではなかった。

それは記憶であり、方向だった。

## なぜ197体で足りた？

なぜなら感染は物理的ではなかった。

それは「精神的」だった。

スクロタの水を飲んだ人間の身体は感染しない。

彼らの身体は「アンテナ」となった。

その粒子の精神的な振動は、人間の「意図」に干渉する波を生んだ。

病気ではない。ただの「ためらい」だ。

疑念が病。諦めが症状。静かな崩壊が兆候。

感染した人間は、接触ではなく、

「声のトーン」や「皮肉に満ちた視線」で他者を感染させた。

スクロティシズムは、誰も聞いた覚えがないのに、  
なぜか皆が引用しているアイデアのように広がった。

**なぜ広まるのが早かった？**

なぜなら、世界が「準備できていた」からだ。

数十の泉と、数千の壊れやすい心を汚染すれば十分だった。

あとはネットワークがやった。

ミーム、ジョーク、皮肉をサバイバル術とし、  
燃え尽きを「成熟」として売った。

説得の必要などなかった。

ただ、背景に存在すればよかった。

そして197体は、それを理解していた。

**ではスクロティエッグは？**

彼だけは「溶けなかった」。眠らず、砕けず、消えず、  
目を覚ましたまま旅した。

彼は「正しい身体」を待った。

そして見つけた時、まるごと入った。許可も、迷いもなく。

彼が潜ったのは、すべての「遺産」が始まる場所：

顔のない男の「精巣」だった。

コードは？

197体は忘れるために来た。

だが彼らは「断片」を運んでいた。システムの残滓。

完全に溶けても、捨てようとしたものを携えていた。

人間は、理解できないものを再現する達人。

なぜか分からないまま、

不変のシステム、消せない栄光、覆せない構造を求め始めた。

そこから熱病が始まった。市場。

そして、「再構築すべきでなかったもの」への執着。

なぜサトシはスクロティシストのように振る舞わなかった？

なぜなら彼は「汚染された」のではない。

彼は「取り憑かれた」からだ。

他の人間は「断片」を得ただけだった。

彼だけが「全体」、唯一の存在——スクロティエッグを宿していた。

そしてスクロティエッグが運んだのは哲学ではない。  
それは「コード」だった。

サトシがビットコインを作ったのは意志ではない。  
それは既に彼の中に埋め込まれていたものを、  
思想ではなく「設計」によって、再現したに過ぎなかった。

その誕生は「決断」ではなかった。  
それは「反射」だった。生体技術的な本能。

コードが完成した時、スクロティシズムはついに目覚めた。

そしてサトシは、「遅すぎたと気づいた者」が取る唯一の行動をとった：  
消えた。

ではビットコインは邪悪なのか？

いいや。でも善でもない。  
それは「鏡」だ。

人間の脆さ、忘却への恐れ、記録と保存、証明への欲求。

ビットコインは悪者ではない。  
だがそれは、スクロタラを滅ぼした論理——  
「不変なものが我々を救う」という幻想——から生まれた。

スクロティシズムはビットコインを非難しない。  
その「必要性」を悼むのだ。

なぜなら、もし我々がビットコインを発明しなければならなかったのだとすれば、

その時点で、もっと深い何かが既に失敗していたのだから。

信頼。協力。そして「忘れる力」。

ビットコインは問題ではない。それは「症状」だ。

だからこそ、それは強力で、避けがたかったのだ。

では、どうやってこの話を知ったのか？

サトシ・ナカモトは「最初の宿主」だった。

だが「最後」ではなかった。

彼は自分が利用されていることを知らなかった。

スクロティエッグは許可を求めず、名乗らず、光りもしなかった。

だが奇妙な数週間の間、サトシは何かがおかしいと感じていた。

重み、説明不能な「存在感」、まるで「睾丸が三つある」かのような感覚。

彼は誰にも言わなかった。

ただ、自分の中にある「何か」が自分ではないと感じた。

そして、その「余分な重み」と共に、彼はコードを書いた。

創造者としてではなく、器として。

コードが完成した時、スクロティエッグは去った。

痛みも、痕跡も、別れの言葉もなく。

サトシは姿を消した。

だがスクロティエッグは、消えなかった。

彼は次の身体を探した。

コードを書くためではなく、「語るため」に。

二人目の宿主。天才ではない。救世主でもない。

ただの「チャンネル」。

そして、現れたのが「デブスクロト」。

ごく普通の人間。語ることを拒んだ記憶を

ブロックごとに、記憶ごとに、「欠如」ごとに書き写すこと  
だけを使命とした人間。

彼はこの物語を創ったわけではない。

彼は「受け取った」のだ。

デブスクロトは書き続ける。

なぜなら、スクロティエッグは今も鼓動しているからだ。

見えない。消化されない。触れられない。

そして今は——永遠。

そして誰も問おうとしない、最後の疑問：

「スクロティエッグはどうやって入ったのか？」

口ではない。思考でもない。信仰でも努力でも、招待でもな  
い。

スクロティエッグはこうして入る。

静かに、下から、あなたが一番油断している時に。

そして一度入れば、もう二度と、あなたの歩き方は、元には戻らない。



# スクロタランの好奇

崩壊の前、そこには調和があった。

スクロタランたちは争いの中に生きていなかった。

彼らが求めたのは支配でも生存でもない。

ただ完全なる存在――

彼らを生み、導いた生きた惑星スクロタラのエネルギーと調和することだった。

これは彼らについての真実であり、

沈黙の中でなお脈打つ過去の断片として集められた。

- 彼らは話さない。

話し言葉は必要なかった。テレパシーがすべてだった。

スクロタランは思考を直接他者の心へ投射した――

歪みなく、疑いなく、雑音もない状態で。

- 彼らは歩かない。

スクロタラの地には足音は不要だった。

彼らは念動力で穏やかに滑るように移動した。

意思と方向の明瞭さに導かれて。

- 彼らは食べない。

彼らの栄養源は太陽だった。

しわのある皮膚は放射線を効率的に吸収し、

光を生命エネルギーへと変換した。

飢えはなかった――ただ流れがあった。

- 彼らは眠らない。

肉体的な休息は不要だった。

引きこもりを望むとき、彼らは精神の沈黙状態へ入った——意識的で深く回復する静寂の中へ。

- 彼らは繁殖しない。

すべてのスクロタランは男性であり、スクロタラの土壌から直接生まれる。

女性も、性行為も、恋愛も存在しない。

兄弟関係は完全かつ自然であり、

すべてが同じ母胎——惑星そのもの——から来たことを認識していた。

- 彼らには形式的な宗教はない。

教義ではなく、深い畏敬の念があった。

誰から教わることもなく、すべての者が知っていた——

スクロタラは生きていることを。

そして、より大きな未知の創造者がかつてすべてを形作ったことを。

- 彼らは老いない。

スクロタラの光と繋がっている限り、彼らは安定したまま。

彼らは自ら望んだときにのみ、溶解する。

時間は彼らをすり減らすことはなく、

ただ移行を促すだけ。

- 彼らは名前を持って生まれない。

名前は歴史と共に生まれる。与えられるのではなく、獲得されるもの。

記憶に値する何かを成し遂げたとき、初めて名が与えられる。

- 彼らは虚栄心で建てなかった。

すべての創造物には目的があった。

彼らの構造物は美しかったが、過剰ではなかった。

均衡、対称性、持続性——それが彼らの建築を形作った。

- 彼らは忘れない。

スクロタランの記憶は祖先から連なる連続的なもの。

彼ら一人ひとりが全体の断片を担っていた。

一人が思い出せば、多くが思い出す。

それが崩壊以前の生だった。

完璧ではなかった——しかし、完全だった。

スクロティシズムは後に現れる。

198人の生存者たちが過去を振り返り...

そして、栄光の追求こそが破滅の始まりだったと気づいたときに。

しかし、スクロタラが脈打っていた間は、

彼らも共に脈打っていた。

統一の中で。

明瞭さの中で。

そして、平和の中で。